様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：２４３０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０２２４５

研究課題名（和文）能の略式演奏の歴史と現在―新しい演出形態を構想するために

研究課題名（英文）The excerpt performance formats of Noh play : their history and the present

研究代表者
高橋　葉子（TAKAHASHI, YOUKO）

京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・客員研究員

研究者番号：２０７６６４４８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,700,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では能の音楽における略式演奏の歴史と現代的意味を追求し、次の諸点を明らかにした。1.江戸中期の上方における略式演奏の実態、2.能の伝承と公演における歴史性、3.一調の歴史的変遷、４.江戸中期から近代までの謡の音楽的変化、5.近現代の略式演奏と素人の活動、6.略式演奏の創造性を活かした実践的研究と教材研究。研究全体を通して、略式演奏の音楽的・形態的変遷について具体的な新知見を提示し、社会情勢や能楽組織との歴史的関係を明らかにした。また近代の京都の愛好家の記録を作成し、現代の能楽普及の課題として、略式演奏を活かした実践的な取組みを行った。

研究成果の学術的意義や社会的意義
能は深い精神性と高い芸術性を備えた舞台芸術だが、もう一方の側面として、座敷芸や稽古事として身近に享受され隆盛した長い歴史がある。世阿弥が「内にての音曲」と語っている、謡や舞による略式演奏がそれである。が、略式演奏の歴史と意義に焦点をあてた研究は未だ少ない。本研究では、玄人の略式演奏、および日常的な音楽としての素人の略式演奏各々のあり方と、社会変化や能楽組織とこれらの重層的な関わりを論じた。また音階や音進行等の音楽上の変化や演奏形態の変化について新知見を発表した。研究成果を踏まえ、略式演奏の自由性を活かした普及教材の研究や、諸芸道書の横断的研究に発展させている。

研究成果の概要（英文）：The aim of this project is to study historical development of excerpt performance formats of Noh music and to make clear their significance in present-day Noh.This project's are:(1)development of excerpt performance formats of Noh at Kamigata area in the middle of Edo period,(2)historical aspects of teaching and leaning of Noh and recital forms of Noh,(3) historical aspects of iccho format's performance practice,(4)musical change of utai songs from the middle of Edo period to the modern times, (5)excerpt performance formats in modern times and roles of amateurs in modern history of Noh,and (6)study of original teaching materials utilizing excerpt performance formats of Noh music.

研究分野：能・狂言

キーワード：能の略式演奏　素人　謡と謡本　京観世　稽古能　能とお辞儀　一調　音楽演奏と職制

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

謡や囃子など能の略式演奏は、世阿弥が「内にての音曲」などの言葉でしばしばその心得を説いているように、能役者にとっての重要な本芸として能の歴史に大きな位置を占めてきた。現在、略式演奏の種目は、能楽師にとっては稽古階梯の一つであるが、愛好家においてはむしろ略式演奏が目的である場合が多く、完全上演の能はその参考的存在と考える人も少なくない。しかし、従来の能楽研究においては、略式演奏は二次的芸能あるいは便宜的な縮小形態という側面からしか見られない傾向があり、ごく一部を除いては研究が進んでいなかった。近年、能の鑑賞芸術としての卓越性がますます評価されている一方、その地盤としてあった謡や囃子の愛好文化は衰退し、享受層の活力が失われつつある。申請者らは、能の実技の修得や謡文化の研究を進めていたが、以上のような現状を鑑み、略式演奏の独自の創造性と可能性について学術的に研究する必要を感じた。

２．研究の目的

本研究では能の略式演奏を、便宜的な形態ではなく、能に活力と創造力を提供するものとしてとらえた。研究では（１）能における略式演奏の位置づけと歴史的様相を明らかにすること、（２）略式演奏の形態上・技法上の変遷とその社会的背景を明らかにすること、（３）近現代の略式演奏研究として、略式演奏の主たる担い手である愛好家（素人）の活動を調査・記録すること、および現代と将来の能楽に資する略式演奏形態を提起すること、以上３点を企図した。全体を通じて、能を活性化する新しい演出の創造に向けた基礎研究となることを目標とした。

３．研究の方法

上記目的の３点について、以下のような方法を予定した。

（１）歴史的研究については文献研究を主として行い、略式演奏の形態と思想的変遷を論じる。具体的には以下のような文献を取り上げる。岩井家旧蔵資料『能囃子心得』・井伊家伝来文書『能覚書』・鴻山文庫蔵『尊若鼓伝書』・江戸期書上類・金春安住『歌舞後考録』・金春安照『金春安照伝書』・徳田隣忠『隣忠秘抄』・草川清蔵写『地謡心得』・太鼓橋本家文書・近現代の芸談書など。

（２）技法的研究については江戸期と近現代の謡本、謡伝書・囃子伝書、囃子手付、近代の音源などをもとに行い、江戸期から近代までの謡の音階理論の形成と変化、ふし・音進行・地拍子の変化を明らかにする。

（３）近現代の略式演奏や演能、素人の実態研究については、文献研究のほか、現代の演能実態の観察、能楽師と愛好家への取材調査を行う。また、技法研究をもとに、能音楽の理解と普及を目的とした略式演奏の工夫を行い実践する。

４．研究成果

以下の諸点について研究成果を発表した。

（１）江戸中期以降の京都大阪における略式演奏の歴史

藤田は 2011 年 4 月より「京観世の記録化」プロジェクトを主催し、総括として 2016 年 10 月に『謡を楽しむ文化―京都の謡の風景』（藤田隆則・高橋葉子・丹羽幸江編集、京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター研究報告 11）を出版した。その中で藤田・高橋は本研究に関わる２篇の論考を発表した。

①岩井七郎右衛門家旧蔵の音曲伝書『そなへはた』の読解と現代語訳。

岩井家は、江戸中期から昭和前期まで関西能楽界に勢力を誇った観世流の謡の家である。その四代として宝暦後半から享和初年まで活動した岩井直恒は、増大する門弟への教育の必要性と、当時の観世大夫元章の謡本改革への危機感から、自派の音楽理論の体系化を精力的に進めた。『そなへはた』は直恒の代表的な著述書であるとともに江戸期音曲伝書を代表する楽理書である。この読解を通じて藤田は、謡の学習に自習と伝授の二段構造があったことを指摘し、謡という音楽行為が家元制度の肥大化とともに組織化され規範化されてゆく歴史的過程を読み解いた。高橋は、現在まで継承されている岩井直恒の音階理論の革新性と、現在は消滅した歴史的音進行と技法を読み解いた。（「『そなへはた』を現代語訳する試み」、2016、藤田隆則・丹羽幸江・高橋葉子）

②江戸中期の上方における略式演奏の発達

同じく岩井家旧蔵資料のうち、宝暦から寛政ごろの上方における略式演奏の実態を伝える新出資料『能囃子心得』の翻刻解題を行った。略式演奏が興行として成立した上方の文化状況、江戸と上方の略式演奏形態の違い、現代と異なる舞事の省略方法、江戸よりも緩やかな上方の職制のありかたなど、新所見を発表した。（「『能囃子心得』解題と翻刻」、2016、高橋葉子）

（２）能公演および能の伝承における歴史性

明治維新の打撃を受け本格的な演能が困難になった能楽界では、辛うじて稽古が続けられ、心付程度の見料を伴なう稽古能の公開が徐々に行われるようになった。やがて広範な市民が観客層となってからも、能公演は興行として発達せず、稽古能の公開という性格を帯びたまま今日まで続いている。この特徴は特に各流各会派の定期能において顕著である。藤田は、様々な芸能における「お辞儀」のあり方の検証を経て、現代の能公演に内在する「稽古能」の文脈を

明らかにした。（「なぜ能ではお辞儀をしないのか？」藤田隆則、2017）
　能公演を稽古能の公開と位置付ける能楽界の伝統的ロジックは、演能を終わりのない修業の一過程にすぎないと考える能の精神性につながるものであり、略式演奏の位置づけや素人の稽古、素人の精神性を含めた能のあり方そのものに直結する問題である。これは、以前から藤田が提起してきた、能の伝承や教授における「自得」と「素」の意義に深く関わっている。（「能の教授における「自得空間」」藤田隆則、2016）

（３）一調の歴史的変遷
　一調（および一調一声・一調一管）は略式演奏の一種であるが、他の種目と基本的に異なる性格が二点ある。一つは謡や仕舞・舞囃子等が完全形態の演能のための必修科目であるのに対し、一調はそれらの修行過程を超えた高度な余技であり、演奏曲としての独立性が高いことである。もう一つは、能の主役があくまでシテであるのに対し、一調ではシテと囃子が対等の関係にあるということである。こうした性格のため、歴史的に一調という種目そのものに対するシテ方からの強固な否定的見解や、相手方流儀の制限、大夫が謡うことの可否などの様々な議論が江戸時代を通じて存在していた。また江戸時代には、幕府への書上げ等を通じての曲目の管理も行われ、演奏の厳密度も増していた。発表では室町末期から近現代の資料を通じ、式楽という歴史的条件や能楽特有の職掌制度が、一調の形態と思想の両面に重層的な影響を与えていたことを明らかにした。（学会発表 2018、高橋葉子）

（４）江戸中期から近代までの謡の音楽的変化
　近世の謡には地域により大きな違いがあった。現代のように流儀ごとに全国的に均一な謡が謡われるようになったのは昭和以降のことであり、観世流では関西に勢力を誇った岩井派の謡が大正時代に消滅したが、それは明治以降の統一事業の結果である。本研究では、岩井七郎右衛門派に伝わるウキ節が、江戸中期以前からの観世流に存在したふしであったことを明らかにし、従来「京観世」の名のもとに地域的特徴として捉えられがちであった岩井派の謡が、多く江戸期の観世流の古態を伝えることを明らかにした。また岩井派の謡が地域的な特殊性のためではなく時代的変化による組織的な淘汰の結果消滅したことを論じた。成果発表は以下の論考と学会発表である。
①「江戸中期における謡曲音階論の形成―岩井直恒の十段音法を考察する」
　岩井直恒の十段音法」江戸中期京都の謡役者岩井直恒がうちたてた十段音法理論は、謡の音組織を初めて体系的に示した理論であり、現在の観世流謡曲理論の骨格となっている。本稿では十段音法に至るまでの直恒の音楽理論形成の跡を、観世流大西家に伝存する資料をもとに明らかにした。（2016、高橋葉子）
②学会発表「明和改正謡本の節付「ウ」―江戸中期能楽観世流の中音旋律」
　観世流十五代宗家観世元章は大規模な謡本改定を行ったことで知られる。その改訂の過激さのゆえに、元章没後、詞章に関しては多くが旧に復したが、節付に関しては踏襲されたものが少なくない。進歩的で優れた記譜法だったからである。発表では、その中で従来理解されなかった中音部のウキの表示を、岩井家の資料等をもとに解読し、江戸中期から近代までの観世流に、現在継承されないウキ節があったことを明らかにした。（東洋音楽学会大会、2016、高橋葉子）
③「謡本から見た梅若家と観世喜之家―近代観世流の節付け改革」
　謡は近代になって一般市民の間に急速に普及した。それに伴ない謡本の出版と記譜法の整備が進められ、謡の音楽表現に対する謡本表記の規定力も大きくなった。本稿では記譜法の点から、近代観世流の代表的謡本である観世宗家、観世喜之家、梅若家の 6 種の謡本の系統と相違点を明らかにし、謡本改革を通じた各家の勢力競合の一端を明らかにした。（2017、高橋葉子）
④「近代能楽観世流のフシの統一―ウキをめぐって」
　近代の能楽復興と謡の全国的普及によって、家元制度は組織的に整備され強化されていった。交通手段や音楽産業の発達とあいまって、流儀による謡の音楽的統一が強力に進められた。本稿では、②の学会発表をもとに、大正初期まで関西で謡い継がれていたウキ節が流儀統一事業によって組織的に淘汰された経過を明らかにした。（2017、高橋葉子）
⑤学会発表「謡のふしの変遷―「京観世」岩井派大西新三郎の音源に聞くウキのふし」
　大正時代に淘汰された観世流のウキ節を確認できる唯一の音源が、レコード史研究家の大西秀紀氏より新出資料として提供された。これをうけ、他の同時代の音源資料とともに楽劇学会例会で紹介した。（2018、高橋葉子）
⑥「『謡曲秘伝書』と常磐会謡本―残された岩井派の謡」
　『謡曲秘伝書』は大正初期に大阪の観世流大西家より出版された岩井派の謡伝書で、観世流統一以前の古い謡い方が記録された希少な伝書である。本稿では、同書の著者が大西閑雪であり、法政大学鴻山文庫に零本のある『大西閑雪謡話録』が草稿であることを解明した。その上で同書に記録された古いふし・技巧を逐一解説した。大西閑雪は同書と同時に全 208 曲の独自の謡本も出版しているが、この時期には観世流の流儀統一事業がかなり進んでおり、宗家以外による謡本発行も禁止行為であった。論考では、当時の実態としてはすでに、岩井派の謡が衰退していたことを推論し、あえてこの時期に謡本と謡伝書を出版した意図を、岩井派の勢力挽回のためよりも、後世への伝承のためだったと位置付けた。（2019、高橋葉子）
⑦「明治の音源に聞く謡のフシ―大西新三郎〈小督〉駒之段」

⑤の学会発表を補足し、資料紹介稿を発表した。併せて新三郎の事績に関する沼艸雨の発言内容（『能楽名人のおもかげ』1953、檜書店）の補正を行った。（2019、高橋葉子）

（５）近現代の素人と略式演奏の実態調査。

①「梅若派謡本刊行者「小梅洲」」

近代に出版された初めての直シ入謡本は、明治 18 年に梅若派から限定出版された謡本で、詳細・正確な記譜と石版刷の鮮明な版面が当時の水準を超えるものとして評価されている。その刊行者は「小梅洲」なる不明の人物で、同派の玄人であろうと推測されていたが、本稿では、これが小川勘助（小川梅洲）という 21 才の素人による刊行であることを解明した。小川は明治 15 年に初世梅若実に入門して謡の習物を数々伝受し、分家の梅若薫を経済的に後援していた。一介の素人である小川の名は従来埋もれていたが、その功績を紹介した大正 3 年刊の『謡曲名家列伝』は、素人ばかり 120 人を掲載し、素人を近代の能楽史を築いた存在とうたっている。本稿では、同書に象徴される明治の能楽観と能楽界における素人の重要性を指摘した。（2018、高橋葉子）

②報告書『京都の能楽愛好家』

主に初年度から 2、3 年度にかけて行った京都の素人 3 家族に対するインタビューの記録をまとめ、資料考証を行って報告書『京都の能楽愛好家』を作成出版した。補説として明治から昭和初期にかけての愛好家を掲載した名鑑・雑誌類を紹介し、能楽界における素人の地位が大正時代に低下したことを指摘した。（2020、高橋葉子・藤田隆則）

（６）略式演奏の創造性を活かした実践研究と教材研究

①「状況のアーキテクチャー『うつしから学ぶ』」

「真似る」こと、「うつす」ことは、「学び」の原初的な行いである。伝統音楽の体得のために、小学生を対象とし、太鼓の基本的リズムと笛の基本的メロディーを用いて「真似」のしやすい遊具的装置を作り、ワークショップを行った。（京都市立芸術大学主催　拡張された場におけるアートマネジメント人材育成事業、2017、藤田隆則、高橋葉子、永原順子）

②伝統音楽普及促進事業での教材研究

分担者が参与している上記表題のプロジェクトにおいて、練習用の楽曲を制作し、ワークショップと DVD 教材に活用した。太鼓と笛の構造的連関が感得できるよう考慮し思い切った簡略化を行ったが、実地指導にはプロの能楽師があたり、不足感のない有効な教材を制作提供した。（『能は面白い！《囃子編》 』伝統音楽普及促進事業実行委員会編、2019、藤田隆則）

（７）今後の発展的研究として

以上のうち歴史・技法研究については、他の芸道との横断的研究と音曲伝書の精読を進める必要性が再認識され、今年度から発展的に音曲伝書用語の体系的研究を開始している（「謡伝書用語の体系的研究―演奏の理念と表現を中心に」課題番号２０Ｋ００１３１、研究代表者高橋葉子）。能の演奏における伝統的な習慣・規則・考え方など、本研究で行った能楽師へのインタビューで得られた情報を、この研究でも活かす予定である。

略式演奏の創造性を活かした実践的研究は、現在行っている、能音楽の構造理解のための効果的な総合楽譜の研究の地盤となっている。（法政大学能楽研究所拠点研究「能の映像にそえる記譜の研究」藤田隆則・高橋葉子ほか）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計19件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 藤田隆則	４．巻 1131
２．論文標題 七五調四拍子論と「変拍子」	５．発行年 2020年
３．雑誌名 楽報	６．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 高橋葉子	４．巻 16
２．論文標題 明治の音源に聞く謡のフシ―大西新三郎〈小督〉駒之段	５．発行年 2019年
３．雑誌名 日本伝統音楽研究センター研究紀要『日本伝統音楽研究』	６．最初と最後の頁 75-86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN1347-3689	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 高橋葉子	４．巻 30
２．論文標題 『謡曲秘伝書』と常磐会謡本―残された岩井派の謡	５．発行年 2019年
３．雑誌名 武蔵野大学能楽研究資料センター紀要	６．最初と最後の頁 35-66
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN1880-053X	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 藤田隆則	４．巻 1127
２．論文標題 音曲の理想を言い表す言葉	５．発行年 2019年
３．雑誌名 楽報	６．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 1123
2．論文標題 音曲における顔振り	5．発行年 2019年
3．雑誌名 楽報	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 1121
2．論文標題 譜字の母音と音の高低	5．発行年 2019年
3．雑誌名 楽報	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 1119
2．論文標題 伝統音楽の言葉・身体・思想（12）―自由リズムの背後にあるもの	5．発行年 2019年
3．雑誌名 楽報	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋葉子	4．巻 12
2．論文標題 謡の極意―拍子の秘事	5．発行年 2018年
3．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6．最初と最後の頁 111-120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 12
2．論文標題 『師伝書』に授受された謡の体系と謡のあるべき姿	5．発行年 2018年
3．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6．最初と最後の頁 121-127
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 1111
2．論文標題 伝統音楽の言葉・身体・思想（8）―譜字をうたうのはなぜか	5．発行年 2018年
3．雑誌名 楽報	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 1113
2．論文標題 伝統音楽の言葉・身体・思想（9）―伝統音楽の芸道化	5．発行年 2018年
3．雑誌名 都山流楽報	6．最初と最後の頁 2-3
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 2189-6259	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋葉子	4．巻 29
2．論文標題 梅若派謡本刊行者「小梅洲」	5．発行年 2018年
3．雑誌名 武蔵野大学『能楽資料センター紀要』	6．最初と最後の頁 11-21
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 1880-053X	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋葉子	4．巻 14
2．論文標題 近代能楽観世流のフシの統一―ウキをめぐって	5．発行年 2017年
3．雑誌名 日本伝統音楽研究センター研究紀要『日本伝統音楽研究』	6．最初と最後の頁 90－112
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 1347-3689	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 11号
2．論文標題 研究ノート「なぜ能ではお辞儀をしないのか？」	5．発行年 2017年
3．雑誌名 『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』	6．最初と最後の頁 111-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋葉子	4．巻 28
2．論文標題 謡本から見た梅若家と観世喜之家―近代観世流の節付改革	5．発行年 2017年
3．雑誌名 武蔵野大学『能楽資料センター紀要』	6．最初と最後の頁 1-34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 1880 053X	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 高橋葉子	4．巻 13号
2．論文標題 江戸中期における謡曲音階論の形成ー岩井直恒の十段音法を考察する	5．発行年 2016年
3．雑誌名 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター紀要『日本伝統音楽研究』	6．最初と最後の頁 150-166
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） ISSN 1347-3689	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 藤田隆則	4．巻 10号
2．論文標題 能の教授における「自得空間」	5．発行年 2016年
3．雑誌名 神戸女子大学古典芸能研究センター紀要	6．最初と最後の頁 138-144
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 高橋葉子
2．発表標題 謡のふしの変遷―「京観世」岩井派大西新三郎の音源に聞くウキのふし
3．学会等名 楽劇学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 高橋葉子
2．発表標題 一調の歴史的変遷―序説
3．学会等名 東洋音楽学会
4．発表年 2018年

1．発表者名 高橋葉子
2．発表標題 明和改正謡本の節付「ウ」―江戸中期能楽観世流の中音旋律
3．学会等名 東洋音楽学会
4．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

1．著者名 高橋葉子・藤田隆則 共著	4．発行年 2020年
2．出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5．総ページ数 72
3．書名 京都の能楽愛好家	

1．著者名 藤田隆則・高橋葉子・丹羽幸江 共著・共同編集	4．発行年 2016年
2．出版社 京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター	5．総ページ数 295
3．書名 謡を楽しむ文化ー京都の謡の風景	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	藤田　隆則 (FUJITA TAKANORI) (20209050)	京都市立芸術大学・日本伝統音楽研究センター・教授 (24301)	